

津ライスニュース 令和5年産第2報

令和5年7月10日

津地域農業改良普及センター 電話:059-223-5103

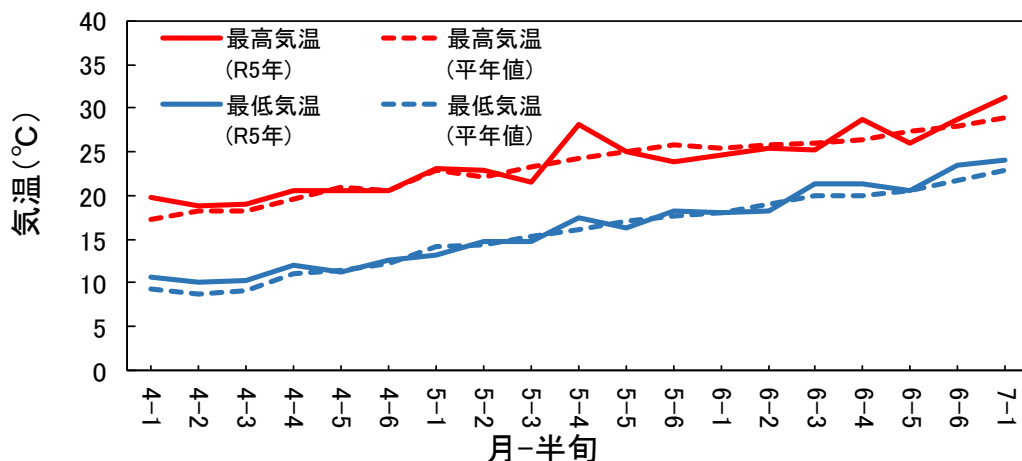
梅雨入りが5月29日と平年よりも8日程度早く、気象庁の予報によると、今後もしばらく西日本から日本海側に前線が停滞し、東海地方の天候は不安定になる見込みです。現在はエルニーニョ現象が発生しています。この現象が発生すると、夏の気温は低い傾向となりますが、地球温暖化などの影響により、今後の気温は高くなる予報であり、米の品質への影響が懸念されます。

幼穂形成期以降の水管理は、水を張りっぱなしにせず、間断灌水により、土壌に酸素と水分を供給し、根を健全に保ちましょう。また、いもち病、カメムシ等の病害虫防除を適期に行いましょう。

気象経過

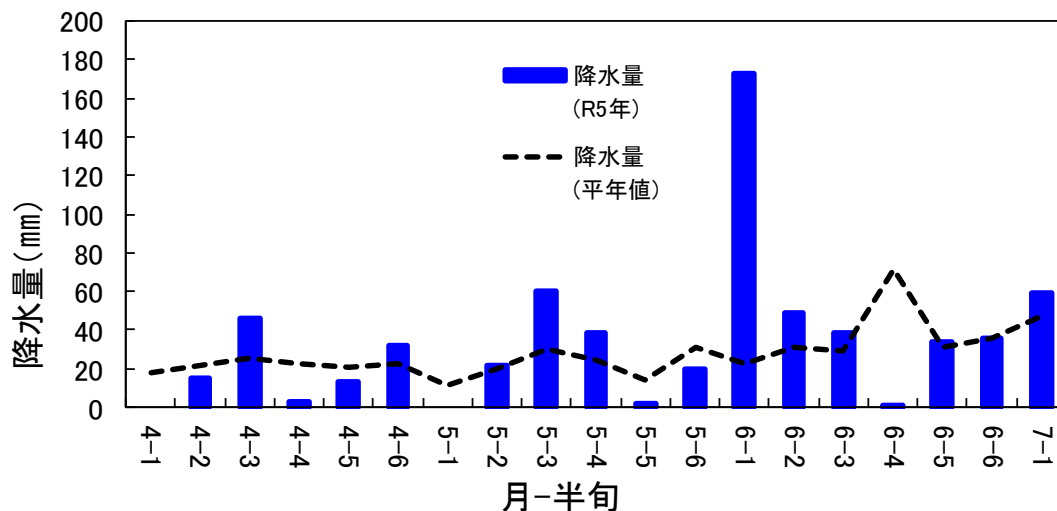
<気温>

5月第4半旬は気温が高く推移しましたが、5月第5半旬から6月第3半旬まではやや低めに推移しました。6月第4半旬以降は概ね平年よりも高く推移しています。



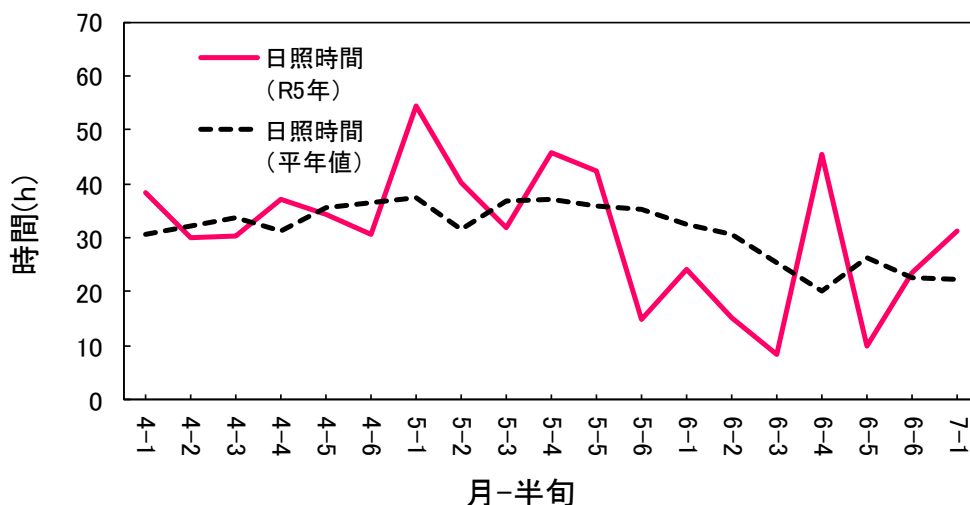
<降水量>

5月29日に梅雨入りしたことから、5月第6半旬以降は降水量が多くなりました。6月第4半旬は降水量が少ないですが、まとまった降雨が多く、概ね平年よりも降水量は多く推移しています。



<日照時間>

5月第5半旬までは日照時間が多くなりました。梅雨入りに伴い、5月第6半旬以降は概ね日照時間は少なく推移しています。



気象庁の3か月予報によると、

7月:前半は曇りや雨の日が多く、後半は平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

8月:平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

9月:天気は数日の周期で変わるでしょう。

3か月間の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

生育の概況

5月上旬までは概ね気温は平年並みに推移したことから、5月上旬までの生育は概ね平年並みとなりました。

5月下旬から6月上旬は気温がやや低く推移したことや日照時間が少なかったことにより、茎数がやや少なめに推移しました。6月中旬以降は気温が高く推移しており、生育が進み、R4年の草丈と比較すると高く推移している状況です。

4月下旬から5月上旬移植を中心に幼穂形成期に入っており、幼穂長は5mm程度となっています。

令和5年産水稻生育基準田 調査データ

R05年産水稻

R05.7.4時点

調査場所	移植日	草丈 cm	茎数 本/m ²	葉色 SPAD	移植後日数
殿村	4月10日	79.4	370.6	34.7	85
安濃	4月28日	81.3	423.5	33.2	67
白山	5月2日	68.5	403.4	31.5	63

(参考)令和4年産水稻生育基準田 調査データ

R04年産水稻

R04.7.1時点

調査場所	移植日	草丈 cm	茎数 本/m ²	葉色 SPAD	移植後日数
殿村	4月10日	70.0	388.1	39.8	82
安濃	4月27日	75.7	379.1	36.8	65
白山	4月25日	73.5	425.3	38.7	67

○令和5年産水稻生育予測

【令和5年7月7日時点】

品種	移植日	幼穂形成期	出穂期
コシヒカリ	4月25日	6月25日	7月15日
	5月10日	7月3日	7月26日
三重23号	4月25日	6月21日	7月12日
	5月10日	6月29日	7月20日

病害虫の発生状況と対策

<いもち病>

今後、いもち病発生の適温(25～28℃)となります。降雨が2日以上続き、最低気温が17℃以上となると、約1週間の潜伏期間をおいて発病します。今後、雨の日が続き、高温多湿で感染に好適な条件が揃うと、本田でのいもち病発生が懸念されます。中山間の風通しが悪い地域や日陰になりやすい地域を中心にいもち病の発生がみられます。感染源を減らすこと、早期発見が大切です。

いもち病発生予測支援システム(ブラスタム)による発生予測において、津管内では6/12と6/13に好適条件が確認されています。感染源(補植用の置き苗など)を減らすとともに出穂期前後の時期を主体に防除を実施しましょう。

- ・いもち病発生予測支援システム(ブラスタム)

【<https://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/39584007416.htm>】

または「三重県 ブラスタム」で検索を。

<斑点米カメムシ類>

カメムシの発生は6月下旬から始まり、水稻の出穂期頃の7月中旬頃が発生のピークとなります。中山間地域を中心に畦畔等、ほ場周辺での発生が見られます。

今年はイネカメムシの発生が平年と比べ早くなっています。カメムシ類の今後の発生状況に注意しましょう。

今年は出穂が早まる見込みとなりますので、適期防除を実施しましょう。

- ・カメムシ類の増殖場所となるような畦畔雑草を早めに除去しましょう。
- ・草刈りは出穂10日前までに行いましょう(出穂直前や出穂後の草刈りは、水田への害虫侵入を助長します)。
- ・防除は穂揃期を中心に行い、発生が多い場合は、その1週間後(乳熟期)を目安に追加の防除を実施しましょう。なお、剤によって散布適期が異なるため、注意してください。

- ・病害虫防除所ホームページ

【<https://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/>】

- ・斑点米カメムシ類の発生消長

【<https://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/89947000001.htm>】

<ウンカ類、コブノメイガ>

通常は、9月中旬以降に収穫する中晩生品種や6月植えでの被害が多く、ウンカでは、トビイロウンカによる収穫前の坪枯れ、コブノメイガでは7月中旬以降の葉の食害が問題となります。カメムシ防除に用いる薬剤で効果があるので、カメムシ対策と兼ねて防除を実施しましょう。できるだけ薬剤が株元にかかるよう散布してください。

今後の栽培管理

<中干し後の水管理>

- ・5月初旬までに植えた早生品種では幼穂形成期に入っています。中干しを終了し、水を掛け始めましょう。
- ・中干し直後は根が弱っているため、急激に湛水すると根の老化や根腐れによる下葉の枯れ上がりが進むことが懸念されます。浅く入水→自然に引くのを待つ→浅く入水というように間断かん水を行いましょう。
- ・幼穂形成期～出穂・開花期～登熟中期(出穂後25日頃まで)は水が最も必要な時期になります。水を切らさないよう間断かん水を心掛けてください。特に出穂・開花期に強風を受けると茎葉からの蒸散が多くなり、脱水症状により白穂や籾の褐変が発生します。台風や大風が予想されるときは湛水しましょう。
- ・落水を早くしすぎると白未熟粒の発生を助長します。収穫7日前までは落水せず、足跡水程度の水分を維持しましょう。

<穂肥>

穂肥は適期に適量を施用しましょう。

※全量基肥肥料(一発基肥)施用田は原則穂肥は必要ありません。

ただし、登熟期に高温が予想される場合は、白未熟粒対策として出穂期に窒素成分で 1kg/10a 程度の追肥を行うのが有効です。

※施肥過多は食味低下の要因になるとともに、倒伏・穂いもちの発生を助長するので注意しましょう。

○穂肥の施用効果が期待できる稲の姿とは

- ・葉色が薄くて(葉色 4.5 以下)、葉が直立している。(株元スッキリ)
- ・地際の節が短く(第 4 節間が 3cm程度)、茎が太い。
- ・過剰な分けつが少なく、草丈が 70cmを超えないこと。
- ・病害(特にいもち病、紋枯病)の発生が少ないこと。

○穂肥の施用時期

◇一回目

- ・コシヒカリ 出穂 18～15 日前(幼穂長 1.0～2.0cm)
- ・その他品種 出穂 22～20 日前(幼穂長 0.5cm)

◇二回目

- ・一回目の穂肥施用 7～10 日後

コシヒカリの穂肥施用の目安(資材は例)

葉色(葉色板)		3.5~4.0	4.0~4.5	4.5以上
草丈		65cm	70cm	75cm以上
NK化成7号 (17-0-17)	一回目	10~15kg/10a	7~10kg/10a	やらない
	二回目	10kg/10a	10kg/10a	10kg/10a
IB045 (20-4-5)	一回目	20kg/10a	10kg/10a	やらない